

言語・コミュニケーション：文化社会的観点

植野 貴志子

Kishiko Ueno

文学部／英語英文学科

教授／博士（文学）



研究業績データベース

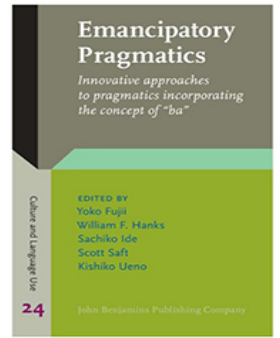
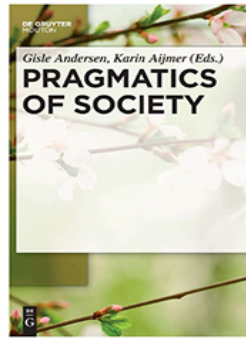
YouTube公式動画

キーワード

社会言語学／語用論／談話分析／異文化コミュニケーション

研究概要・実践活動

社会言語学、語用論の手法を用いて、言語・コミュニケーションを研究しています。特に、日英語の自然発話コーパスをデータとして「質問行為」や「聞き手行動」を分析し、顕在化した日本語母語話者と英語母語話者の言語使用の特徴を文化・社会の観点から考察しています。さらに、研究結果をもとに、なぜ「日本人は質問が苦手」とみなされることがあるのか、といった異文化コミュニケーションの問題も考えています。近年は、言語・コミュニケーションを「場の理論」で説明する試みや、言語と自己意識・身体感覚の相互関係を探究する学際的研究にも取り組んでいます。



Pragmatics of Society (2011, 共著章執筆) Emancipatory Pragmatics (2025, 共編著・単著章執筆)



国際語用論学会(2023年、ベルギー)における口頭発表の様子。日本語自称詞を「場の理論」の観点から分析



章を担当したThe Cambridge Handbook of Sociopragmatics (2021)『場と言語・コミュニケーション』(2022)『解放的語用論への展開』(2014)の3冊

研究・社会活動実績

科研費挑戦的研究(萌芽)「言語・身体・自己意識の相互関係に関する通言語的研究：学際的アプローチに基づいて」(2021-24)、基盤研究(C)「日本人の英語発話モデルの構築—話ことばの日英対照研究を基に」(2017-22)、および「日本語話者と英語話者の質問行為」(2013-15)を代表者として推進。「場の語用論」「解放的語用論」などの理論構築にも取り組んでいます。社会言語科学会監事、共創学会理事を務めています。

産学官連携の可能性

日本語・英語におけるものの見方や、異なる言語文化におけるコミュニケーションのあり方を分析しています。得られた知見は、教育、企業、地域など多様な場面でのコミュニケーション支援や相互理解の促進に活用できます。

外国語習得における統語と語用のメカニズム

木津 弥佳

Mika Kizu

文学部／英語英文学科

教授／Ph.D.



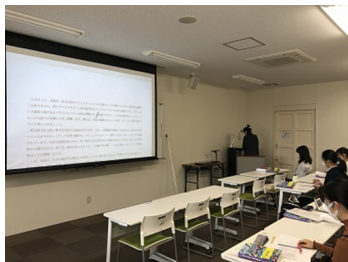
研究業績データベース YouTube公式動画

キーワード

第二言語習得／統語論／語用論／翻訳

研究概要・実践活動

外国語として英語を学ぶ日本語母語の学生と、外国語として日本語を学ぶ主に英語母語の学生が、それぞれの目標言語に関してどのような文法知識を持っているのか、また、それぞれどのような過程を経て会話を含むコミュニケーション能力を発達させていくのかについて研究しています。後者については、特に会話の流れに貢献する表現や自分の考えを表明するための表現に注目して、留学前と留学後でどういった変化が観察されるかを分析します。学ぶ外国語が異なっても、第二言語学習者であれば誰しも直面する問題（あるいは問題とはならないこと）を見つけ、語学教育へ示唆することは何かを考えています。



研究・社会活動実績

北米での大学院と英国での教授期間を合わせ、20年以上海外で研究を続けてきました。現在も国内だけでなく、英国やスペインの研究者と共同研究を行っています。主な研究内容は、1) 日本語の削除現象を外国語学習者がどのように解釈するのかを、母語と他に習得した外国語の影響を比較研究して理論的示唆を探ること、そして、2) 日本語・英語学習者による語用論的能力の習得過程を調査し、教育的指導への応用を提言することです。

産学官連携の可能性

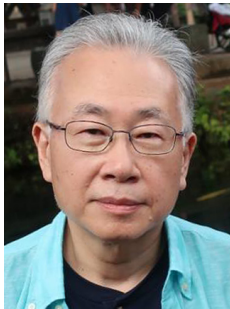
削除現象の研究は、機械翻訳や音声認識での課題となっており、自然言語処理やAI翻訳技術の精度向上に貢献する可能性があります。語用論習得研究は、異文化交流での誤解や摩擦に知見を提供するため、相互行為能力を強化する実践的な教材や研修プログラム開発に寄与し、留学前後の教育支援や国際ビジネス研修に応用可能となります。言語テクノロジー、国際交流、言語教育分野での産学連携により、新たなモデル構築が期待できます。

桑山 敬己

Takami Kuwayama

文学部／英語英文学科

特別招聘教授／Ph.D. (米国哲学博士)



研究業績データベース

YouTube公式動画

キーワード

文化人類学／日本研究／人類学史

研究概要・実践活動

文化人類学的視点から、海外特に英語圏における日本研究を分析している。



研究・社会活動実績

国際学会での研究成果の発表、および単著・論文の作成など。

産学官連携の可能性

海外の日本イメージに関するもの。

「従順さ」の評価から「主体性」の育成へ

小橋 雅彦

Masahiko Kobashi

文学部／英語英文学科

教授／学士（教育学）



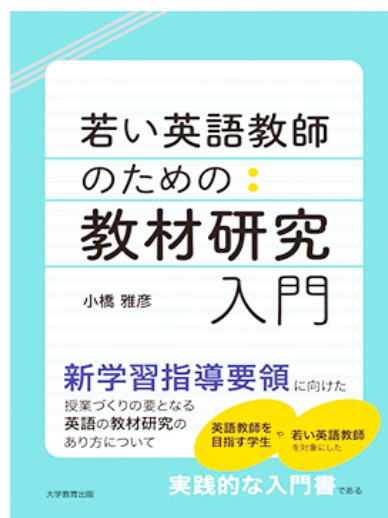
研究業績データベース YouTube公式動画

キーワード

英語教育学／学習評価／英語授業と指導法／英語教師論／教材

研究概要・実践活動

「主体的に学習に向かう態度」の評価をめぐるには、「振り返りシート」などが「勤勉さ」や「従順さ」を評価するためのツールと化し、学習の推進力を与える形成的な評価とは程遠い評価の現状が認められている。そのため、教師が評価を指導改善・学習促進のツールとして捉え直すための実践モデルの構築が研究内容の一つである。学習者の内省能力とメタ認知を育む質の高い振り返りツールを活用し、教師が当該観点の評価を総括的評価ではなく形成的評価として捉え、指導の個別化に活かす観点把握モデルを構築する。これにより、生徒の真の主体的な学習意欲を引き出し、評価を教育活動の中心に据えることを目指している。



研究・社会活動実績

岡山県教育委員会の英語コミュニケーションスキル向上事業では、協力校の公開授業で講師や指導助言を実施した。県立高校の学校評議員や教育課程協議会委員を務め、学校運営計画の策定・運営に参画。また、教員向け研究会で講師を務めるなど、中等教育の現場指導力向上に資する活動を行った。

産学官連携の可能性

「主体的に学習に向かう態度」を的確に測る形成的評価手法の設計と運用モデル：自治体が推進する新しい学習指導要領に基づく評価システムの開発、運用のためのガイドライン作成、そしてその効果検証を共同で行う。

日英語の様々な相違の根底にある要因

齋藤 衛

Mamoru Saito

文学部／英語英文学科

教授／Ph.D.



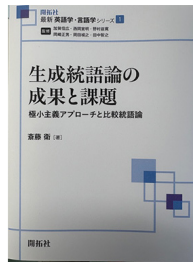
研究業績データベース YouTube公式動画

キーワード

統語論／意味論／比較文法論

研究概要・実践活動

言語間比較、特に日英語比較を通して、人間言語の文法メカニズムを解明する。現在追究されている極小主義統語論は、脳科学との連携や言語の起源の解明も視野に入れており、結果として、極めて限られたメカニズムが仮定されている。その枠組みの中で、表層的には大きく異なる日英語の相違を説明することをめざす。



研究・社会活動実績

論文、研究書の発表に加えて、ヨーロッパおよびアメリカで出版される6専門誌の編集委員を務めている。また、インド、台湾の研究者とともに、1999年にアジア理論言語学会 (GLOW in Asia) を立ち上げ、2022年まで学会常任委員を務めた。

産学官連携の可能性

過去に、住友電工 (Los Angeles)、RTX BBN Technologies (Cambridge, Massachusetts) のコンピューターによるデータ抽出プログラムに協力し、必要とされる日本語文法に関する情報を提供した。

グローバル市民教育における英語教育と異文化理解の実践研究

トーマス・ファスト

Thomas Fast

文学部／英語英文学科

Associate Professor／PhD



研究業績データベース



YouTube公式動画

キーワード

Global Citizen Ship Education／Langage Education／Model United Nations

研究概要・実践活動

My work revolves mainly around the practical application of my students' English and intercultural communication skills, along with their development as Global Citizens, particularly through the Model United Nations; and Study Abroad, for which I have 2 Kaken grants.



研究・社会活動実績

Through Model United Nations and other intercultural events, I try to provide real and practical experiences for my students both in Japan and overseas.

産学官連携の可能性

The development of intercultural and global young people, proficient in English has a variety of applications for industry and government collaboration, as well as NPOs.

小説から読み解くヴィクトリア朝イギリス

新野 緑

Midori Niino

文学部／英語英文学科

特別招聘教授／博士（文学）



研究業績データベース

YouTube公式動画

キーワード

ディケンズ／ブロンテ／ジョージ・エリオット／オースティン／ヴィクトリア朝文化／イギリス19世紀小説

研究概要・実践活動

18世紀に誕生した小説という文学ジャンルが、その最盛期を迎えたのが19世紀。オースティン、ディケンズ、ブロンテ姉妹など、今なお多くの読者を魅了し、映画やテレビドラマ化も盛んな作品が目白押しです。時代を映す鏡とも言えるこれらの作品の魅力や、そこに潜む現代性にも注目しながら読み解くのが私の研究の目的で、これまでにディケンズの全作品をはじめ、同時代の複数の作家の比較や、その背景社会との関係を論じた単著3冊、編著4冊、共著16冊を刊行してきました。



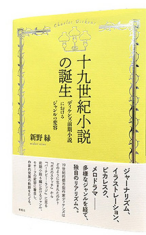
共編著、共著の一部



ディケンズ後期小説に関する
単著2002年刊



19世紀イギリス小説に関する
単著2012年刊



ディケンズ前期小説に関する
単著2023年刊

研究・社会活動実績

ディケンズ・フェロウシップ日本支部長をはじめ、19世紀イギリスの小説家に関する数多くの学会で、学会誌の編集や大会準備委員、事務局長等を務め、学会運営を担うと同時に、高校や放送大学のオープンスクール、公開講座やカルチャーセンター等で、一般市民向けの様々な講演活動を行ってきました。

産学官連携の可能性

AI翻訳や文書作成の発達を目を見張るものがありますが、未だ十分ではなく、真偽の定かではない情報も溢れています。この中で文章の内容だけではなく、文体や表現を包括的かつ理論的に捉える文学研究は、教育、広報、IT産業など幅広い分野との連携によって、言葉による情報の選別や伝達に寄与する可能性があると思っています。

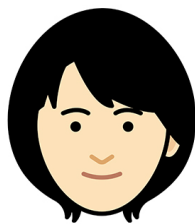
時代を映す女性の語り

松井 かや

Kaya Matsui

文学部／英語英文学科

准教授／修士（文学）



研究業績データベース

YouTube公式動画

キーワード

イギリス文学／アイルランド文学／アングロ・アイリッシュ文学／モダニズム／エリザベス・ボウエン

研究概要・実践活動

20世紀のイギリスとアイルランドのモダニズム小説を研究対象とし、女性作家が戦争や時勢の変化をどのように作品の中に表現したのかを探っています。特に注目しているのは、アイルランドに入植したイギリス人を先祖に持ち、両国に居場所を持ったエリザベス・ボウエンという作家です。彼女の小説やラジオ番組の脚本、数々のエッセイを読み解くことで、彼女が戦時や戦後の人々の心の有り様をどのように捉えていたのか、また、どのような問題意識を持っていたのかを明らかにしようとしています。



アイルランドのダブリン



研究・社会活動実績

長野県看護大学にて、看護学部学生を対象に、「文学から見るコミュニケーション」と題して年に一度講義を行っています。「ケアする側／される側」という枠組みを一旦脇において、コミュニケーションとは何か、他者の視点に立つとはどういうことか、誰かの言葉に耳を傾けるとは、といった内容を、文学作品を通して考える内容です。医療と文学の意外な近さを見出しながら、学生たちや看護大の教員の方と互いに学び合っています。

産学官連携の可能性

いくつかの高等学校で、『ガリヴァー旅行記』等のよく知られた英語圏の作品を用いて、文学と社会の結びつきについてお話をしたことがあります。小説などの文学作品や映画・ドラマといった映像作品の分析、また、女性の生き方を文学史から紐解くような探究学習に関して、何か視座を提供したり、プロセスをともに考えたりすることは可能かもしれません。

格交替現象と世代間の文法変化の可能性

山口 麻衣子

Maiko Yamaguchi

文学部／英語英文学科

講師／文学博士



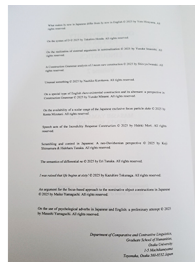
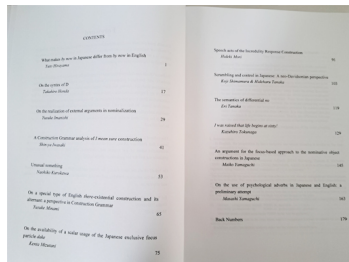
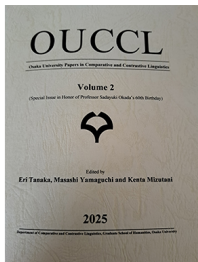
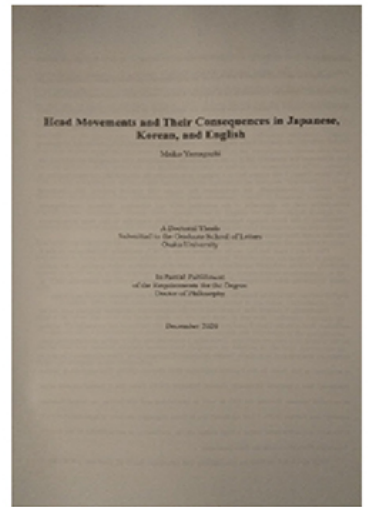
研究業績データベース YouTube公式動画

キーワード

理論言語学／統語論／日本語と英語／日本語と韓国語

研究概要・実践活動

最近日本語の格助詞の交替現象に興味があります。例えば「桜の咲く季節」vs「桜が咲く季節」のような「がの交替」といわれる現象であったり、目的語における格の興味深い現象として、通例日本語では目的語を「を」格表示しますが、「私は言語学が好きだ。」など、述語の目的語であっても「が」格の方が好まれる現象や、「私は日本語が話せる。」や「私は日本語をは話せる。」のように目的語で格交替が起こる場合などもあります。格交替現象には焦点性、年代による差、方言による差など興味深い要因がいろいろと絡んでくるのでこういったメカニズムでこれらの現象が起こるのか研究していくのは面白いと思います。



研究・社会活動実績

これまで出張講義で言語学に関する話を高等学校でさせていただく機会がありました。

産学官連携の可能性

言語間の共通性、相違性に焦点を当てることを通して普遍的な性質を見出すことは、言語学習にも応用ができると思います。例えばある個別言語の特性というものを意識していることは（外国語）学習の面での間違い、誤った表現を避けることにつながると思います。